当報告の内容は著者の著作物です。
第 5 回基幹研究「人類学におけるミクロ - マクロ系の連関」公開セミナー
「社会空間の人類学の可能性」
平成 23 年 1 月 21 日（金）15:00-18:30　AA 研 306 号室

「憑依の社会空間－南タイの学校における出来事の生成をめぐって」　要旨

The Social Space of Possession- an account of event at a school in Southern Thailand

西井　凉子（AA 研）

2004 年 11 月 16 日に、南タイの中学・高等学校で、4 人の生徒が朝礼中に失神し、それがその後の一連の集団憑依事件の端緒となる。その後、痙攣を起こし、耳鳴りがする、近くに何かがいるように感じ、精霊が憑依したかのように泣き叫ぶ、胸が締め付けられて息ができず失神するといった症状を示す生徒が増え続けた。彼らは学校に登校すると憑依し、帰宅すると治るという症状が続いた。12 月になると、ついにマスコミに事件はとりあげられるようになり、新聞やテレビの報道などでこの学校は全国に「憑霊する学校」として知れ渡るようになった。憑依事件は翌年２月にようやく収束した。

本発表は、この学校でおこった集団憑依という現象を、これまでの人類学における憑依をめぐる議論の前提であった非日常的な現象として日常的な生の場と対極的に位置づけることを問い直すことから出発した。憑依という現象には、とりわけ近代人類学が理性的人間の対極のありようとして関心を払ってきた。そうした憑依をめぐる議論はもっぱら「身体」と「こころ」といった二元論にかかわる主体性のあり方をめぐってなされてきたといえる。そこでの焦点は、現に行為する身体と、その主体の一致、不一致、二重性をいかに解釈するかということであった。ここでは、そうした従来の主観/客観、こころ/身体といった対立軸に還元して憑依現象を捉えるのではなく、さらにはモノと身体、人間と非人間、人間と自然といった対立軸の自明性をも問い直して考察をすすめる。そのために導入するのが、主体と客体、意図や非意図を超えて、さまざまな差異の重層性から出来事が生成されるアクチュアリティを捉える「社会空間」という見方である。

「社会空間」とは、実践の場に展開している、異質な関係性や志向や行為の重層性・変容の過程を捉えることをめざす。それは、日常の営みの外にある客観主義的な構造やモデルといった全体を仮定することなく、インタラクションのなかで日常実践がつくられている内在的プロセスを捕らえようとする試みである。

憑依の「社会空間」においては、現場の流れを感受して行為が連鎖することにより、また土地神や水の精霊、その他の池や祠といった様々なモノがエージェント（アクター）

として作用して、出来事が生成していった。ここでは、たんに人の相互行為だけではなく、モノ・環境が介在し、場の空気が作られ、出来事を生成していくプロセスがみられた。本発表は、こうした出来事の生成を社会空間として捉えることにより、憑依が生のアクチュアリティを顕現する場であることを示し、生への新たな視角を拓くことをめざした。